

Project

brief 1

プロジェクト紹介

地域ポテンシャルの最大活用と地元活力を活かした拠点づくり

平尾 浩一

HIRAO Kouichi
パシフィックコンサルタント株式会社
大阪本社
グローバル事業部 建築・都市設計室
室長



藤岡 敦子

FUJIOKA Atsuko
パシフィックコンサルタント株式会社
大阪本社
グローバル事業部 建築・都市設計室
課長補佐



はじめに

淡路島の南あわじ市に位置する道の駅うずしおは、1970年に鳴門みさき荘として開業した施設を活用し、1998年に道の駅として供用を開始している。道の駅うずしおは建設後約50年が経過しており、老朽化や施設拡充等の課題を有するとともに、四国と淡路島を繋ぐ大鳴門橋等において自転車道の整備検討が進められていたため、大鳴門橋周辺環境整備基本構想・基本計画を策定し、道の駅うずしおを含めた大鳴門橋周辺エリアでの再整備を行うこととなった。本施設（以降、「うずまちテラス」という）は道の駅うずしおの大規模駐車場の待合機能強化を担う地域活性化拠点として篠山駐車場を再整備するものである。

道の駅うずしおが位置する鳴門岬先端部は、急峻な地形のため、近傍に多くの駐車台数を確保することが困難な状況である。

一方、道の駅うずしおは様々な道の駅ランキングにおいて1位を獲得している全国でも屈指の人気の道の駅であり、駐車場不足が課題となっていた。

駐車場不足を解消する対策の一つとして道の駅うずしおから約

1.4km離れた位置にある篠山駐車場において約200台の駐車場を確保し、利用者が乗降する巡回バスの運行を行っている。

篠山駐車場にはバスの待合所はなく、炎天下や風雨の際にも小さな仮設テントでの運営となっていた。本州から四国の実家への帰省

途中に道の駅うずしおを利用していた筆者自身がいつかここにバス待合・休憩機能を整備したいと考えていた。運よく篠山駐車場を含む大鳴門橋周辺環境整備基本構想・基本計画策定業務を遂行する機会に恵まれ、「大鳴門橋周辺環境整備基本構想・基本計画」にお

いて



写真1 うずまちテラス全体

表1 うずまちテラスの諸元表	
施設名	道の駅うずしお in うずまちテラス
用途	公衆便所・休憩所・物品販売店舗・飲食店・駐車場
建築物の構造・階数	鉄骨造・地上2階、地下1階
建築物の高さ	7.153m
建築面積	344.11m ²
延べ面積	428.98m ² (地下1階:35.92m ² 、1階:350.77m ² 、2階:42.29m ²)
駐車台数	上段:普通129台、身障者用4台、下段:普通113台、大型4台

対しては、万が一、この自転車道等で事故があった場合にもドクターヘリ等を利用した救護活動がスムーズとなるように、うずまちテラスに災害時用のヘリポートを整備している。

地域ポテンシャルの最大活用

道の駅のゲートウェイ機能を發揮するためには地域ポテンシャルの活用が必須となるため、うずまちテラスには「世界三大潮流のう

いて篠山駐車場にバス待合・休憩機能の整備を提案し、採用され、本施設の設計及び工事監理を実施することとなった。

うずまちテラスの位置付け

The New York Timesが発表した「52 Places to Go in 2019」では、Setouchi Islandsが7位にランクインしており、瀬戸内地域は世界からの注目が高まっている。瀬戸内地域内に位置する淡路島は、食（農・畜・海産物のすべて）や歴史・文化（国生み神話等）、瀬戸内海国立公園・鳴門海峡等の自然といった豊かな地域資源を有しており、大阪・関西万博を契機に多くの来訪が予想される関西エリアとの近接性も活かした展開が期待される。また、鳴門海峡のうずしおは、イタリア半島先端のメッシーナ海峡、北アメリカ西岸とバンクーバー島東岸の間のセイモア海峡とともに、「世界三大潮流」と呼ばれている貴重な地域資源であり、大鳴門橋周辺環境整備事業はこれらの地域資源を活かす事業である。

うずまちテラスは道の駅うずしおの大規模駐車場の待合機能強

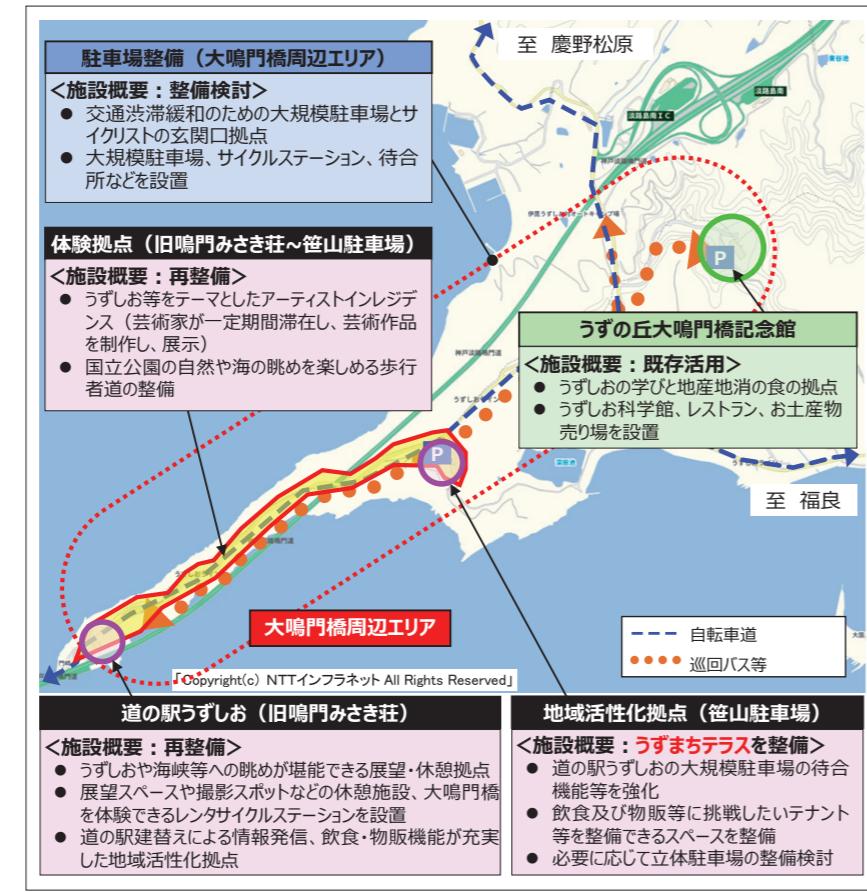


図1 大鳴門橋周辺環境整備基本構想・基本計画におけるゾーニング計画図



図2 広域的な視点での淡路島のあり方



写真2 うずまちテラス正面（出典：うずまちテラスHP、<https://eki.uzunokuni.com>）



写真3 鳴門海峡の眺望 (出典: うずまちテラスHP)



写真4 待合所棟の待合室

ずしお」「瀬戸内の多島海景観」「瀬戸内海国立公園の自然環境」等を最大限活用した施設整備が必要と考えた。

世界三大潮流のうずしおや瀬戸内の多島海景観を眺望できる「半円形の展望テラス」や「駐車場の外周部に配置した展望通路」を整備するとともに、待合室の室内からも同様の景観を眺望できる空間とするため三方向のほぼ全面をガラス仕上げとしている。

瀬戸内海国立公園内に位置するため、日本の国立公園内にふさわしい建築物として木仕上げを主体とした寄棟の建築物とし、インバウンドの観光客にも日本らしい風景を感じられる施設としている。

さらに、地域の資源である木材

を活かすため、檜や杉を主体とした天然木貼りの外装仕上げとしている。

地元活力を活かす施設整備

道の駅等の地域振興施設は地域の生産者等も含めたWIN-WINの関係を構築し、地域の1次から3次産業の方々が喜んでもらえる施設とする必要がある。

道の駅うずしおで販売している「あわじ島オニオニビーフバーガー」は2012年全国ご当地バーガーランプリで第2位、2013年にはバンズの見直しや具も淡路島産の食材をふんだんに使って改良することで、全国ご当地バーガーランプリにおいて悲願の1位に輝いている。

こうした淡路島産の食材をふんだんに活用した飲食物販売を強化するため、うずまちテラスには厨房を設けている。厨房は道の駅うずしおの代替施設としての運用時には1店舗の運用を行っているが、道の駅うずしおの再整備後には2店舗に分割し、チャレンジショップとして利用できる設えとしている。

また、特産品を販売することも重要であり、特産品の販売が可能なスペースとして待合室や屋根付通路を整備している。地域色のあ



写真5 マジョリカタイルを活用したトイレ



を利用するため、桧や杉を主体とした天然木貼りの外装仕上げとしている。



写真6 あわじ島バーカー (出典: うずまちテラスHP)



図3 道の駅うずしおのお土産品
(出典: うずのくにHP, <https://www.uzunokuni.net>)

るオリジナル特産品は、運営者の努力により購買意欲が湧く魅力的なものが開発し続けられており、100点以上のラインナップとなっている。

待合所棟の約半分を占める屋根付通路は、天然芝のイベント広場に隣接したピロティ空間とし、屋外との一体的な利用や屋内空間として実施する様々な地域のまちづくりイベントが開催できる空間としている。竣工式においては芝生広場及び展望テラスにおいて南あわじ市で500年の歴史を持つ国指定重要無形民俗文化財である淡路人形浄瑠璃を公演している。

地球環境への配慮

うずまちテラスを持続可能な施設とするため、地球環境に配慮した施設として整備している。建設地は鳴門岬に位置しており、上水の供給や排水量には制限があるため、トイレの洗浄水は循環利用することで水資源を有効に活用している。

周辺の自然環境に配慮し、雨水排水及び厨房汚水の浄化水は地下浸透処理することで本来の自然の営みに近づける工夫を行っている。

トイレ洗浄水等の余剰水や一部の雨水は散水利用することで水資源の活用を行っている。

待合室の南側に屋根付通路を配置することで、待合室の南側をガラス仕上げとしても直射日光が入りにくくなるため、空調に対する熱負荷が少くなり、夏場の冷房負荷が軽減される設計としている。

ヒートアイランド現象を軽減するため、アスファルト舗装等の必要なエリアは積極的に芝生等を活用し、地表面温度を下げる努力を行っている。

建設地には10年以上は利用されていないと考えられる展望施設が残っていたため、SDGsの視点から既存利用可能な施設も存在すると考え、現状の劣化状況等を調査し、利用できると判断した地下受水槽等は一部機能を更新する等の改修を行い、活用することで使用資源の縮小化を図っている。

おわりに

うずまちテラスは鳴門岬に設置されていた道の駅うずしおの再整備工事のため、代替施設として2023年3月に営業を開始している。うずまちテラスの建築物は約420m²

と小さな施設であるが、2023年3月以降においてもいくつかの道の駅ランキングで1位を獲得している。さらに、道の駅うずしおが工事中で施設規模が小さくなっているにもかかわらず、うずのくに大鳴門橋記念館を含めた大鳴門橋周辺エリアは過去最高の売上を記録している。こうした結果はハード面での施設整備だけで実現できるものではないと考えており、今回は施設規模が小さくなることを危惧し、運営者や自治体等が様々な努力を行った結果と考えている。地域振興施設は運営開始後において、運営者等が絶え間なく努力するきっかけづくりのできる施設として整備することが重要なと考えている。

うずまちテラスでは厨房の柔軟な活用ができる設えや多様に使える屋根付通路等を整備するとともに、芝生広場内には将来的に民間企業の出店時に施設の建設が可能となる申請敷地の設定やインフラに配慮した設計等の工夫を行い、将来的な変化を期待できる施設設計としている。今後、これらの工夫を最大限活用した施設整備及び運営が行われることを期待している。